

# 序

## 外来診療の質を高め、 思考過程を愉しむために

本書の目的は、診察早期（病歴聴取の前半）に妥当性の高い疾患を数個想起できる力を養うことです。

主訴（例：胸痛）から鑑別疾患を20個挙げることができても、実地臨床ではあまり役に立ちません。主訴に加え経過、随伴する症状、年齢、性別などの基本情報から短文をつくり（例：急性の安静時前胸部痛が持続する、50代の男性糖尿病患者），その文脈から想起するほうがより妥当性の高い疾患を数個に絞り込むことができます。それにより問診の組み立てが決まり、効率的で正確な診察が可能になります。

このような基本的な病歴情報のまとめを足し算の形にして、想起すべき疾患と結びつけたものが「症候足し算」です。

本書の主な読者対象は、医学生、研修医、プライマリ・ケア医、看護師、時に専門外も診る専門医など、初期対応を担う方々です。「症候足し算」はもともと富山大学附属病院総合診療部のクリニカル・クラークシップ教材として開発しました<sup>1) 2)</sup>。300題以上の症候足し算を実習中にくり返し読み込むことで、学生は鑑別疾患を考えながら病歴を聴取し、カンファランスでも積極的に発言するようになりました。本書は「症候足し算」に加筆修正を加え、診断に向けての「次の一手」と最も考えられる疾患の「解説」を加えたものです。

本書がわずかでも皆さまの外来診療の質を高め、問診に愉しみを見出される一助となれば望外の喜びです。

本書の企画は共著者の三浦太郎君が学会で羊土社の方と「症候足し算」を話題にしたことから始まりました。

本書ができるまで、たくさんの方々にお世話になりました。鯫島梓先生（富山大学附属病院産科婦人科）には産婦人科疾患に関してコメントをいただきました。山中克郎先生（諏訪中央病院院長補佐）にはお忙しいなか本書を監修していただきました。そして田中桃子様、吉川竜文様はじめ羊土社の皆さんに企画・編集の労をおとりいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

- 1) 北 啓一朗、他：医学生の臨床推論技能を高めるための教育プログラム開発－スクリプトを用いた疾患想起トレーニングの試み－、医学教育、42：351-6、2011
- 2) 三浦太郎 & 小浦友行：外来での効率よい病歴聴取～症候足し算とフレームを使って“攻める”！レジデントノート、15：2768-74、2014

2017年10月

富山大学附属病院総合診療部  
北 啓一朗